学齢期における異年齢集団の形成について(1)

―札幌市における「放課後子どもプラン」の取り組み―

Making different age groups in after school (1) The case study of Plan for children after school in Sapporo

> 結城 孝治 Takaharu Yuki

「札幌市放課後子どもプラン」の概要

全国的な少子化傾向が問題となり、すでに20年が経とうとしている。少子化は単に女性が子どもを産まなくなったという問題ではなく、子どもの育ちと子育てに関する社会全体のシステムの問題と捉えられている。近年、少子化や核家族化が進むなか、女性の就労の増加や就労形態の多様化、都市化による子どもたちの遊びや体験の場の不足など、子どもを取り巻く環境が大きく変化と同時に、家庭での子育て機能だけでなく、地域の子育て機能や教育力の低下も指摘されている。このような現状や変化に対し、国は文部科学省と厚生労働省が連携し、放課後の子どもたちの安全で健やかな居場所を確保するため、平成19年度から「放課後子どもプラン」を創設した。

このような事業は、現在、全国各地で実施されつつあり、札幌市においては、平成16年9月に策定した「さっぽろ子ども未来プラン」(札幌市次世代育成支援対策推進行動計画)において、放課後における児童の健全育成を基本施策の一つとして掲げ、子育て家庭を支援する仕組みづくりに着手してきた。また、平成19年12月に策定した「第2次札幌新まちづくり計画」においても未来を担う子どもたちの健やかな育成のための事業を推進していくことを盛り込み、平成20年8月、国の「放課後子どもプラン」の考え方に基づくかたちで、札幌市における子どもたちの放課後の居場所づくりについての総合的な放課後対策、「札幌市放課後子どもプラン」を策定した。

札幌市の総合的な放課後対策は、「すべての子どもたちが安全で安心に過ごせることができる放課後の居場所づくり」を基本理念に掲げ、「児童会館」と「ミニ児童会館」において、留守家庭児童(「放課後児童クラブ」を利用する児童)と一般利用の子どもを分け隔てなく育成することを基本方針とし、国が推進する「放課後子どもプラン」の考え方に合わせたかたちで、「放課後子ども教室推進事業」と「放課後児童健全育成事業」の一体的実施に取り組んでいる。

国における「放課後子どもプラン」においては、その実施にあたり教育委員会と福祉部局

國學院大學北海道短期大学部紀要第27巻

とが緊密に連携を図ることを明記している。札幌市の場合は、既に設置されていた児童会館とミニ児童会館を管轄していた福祉部局の「子ども未来局」と教育委員会による連携プロジェクトが中心となり、このプランの推進を図っている(図1)。特に、新たに児童会館などの施設を増築していくことが財政的にも困難な現状のなかでは、小学校の余裕教室などを活用するため、教育委員会との協力体制のもと小学校との質的な連携が本プロジェクトの重要な役割を担うことになる。

子ども未来局の役割

- ・ 放課後などの居場所づくりに関する事業の企画及び実施
- ・ 児童会館及びミニ児童会館などの事業の推進
- ・ 他の関係部局との調整
- ・ 札幌市放課後子どもプランに関する進行管理

教育委員会の役割

- ・ 学習支援の充実方策の企画
- ・ 小学校の余裕教室などを活用した居場所づくりを行う場合の小学校との調整
- ・ 札幌市放課後子どもプランに関する小学校や子どもへの周知

<「札幌市放課後子どもプラン」より>

図1 子ども未来局と教育委員会の役割分担

札幌市における「児童会館」とは、児童福祉法(法第40条)において児童館にあたいする 児童厚生施設であり、子どもの文化的素養を培い、その福祉を増進するために設置され、高 校生以下の子どもたちの放課後の生活を豊かにし、異年齢集団での遊びを通して、地域にお ける子どもの交流をより一層深めることを目的とした施設である。

現在(平成20年8月), 札幌市内の児童会館数は104館を数え, 1 中学校区に1 児童会館を基本とした整備計画を達成している。また、そのうちの99館の児童会館において、留守家庭の「低学年」の子どもを対象とした「児童クラブ」を開設している(図2)。小学校区に対する児童会館の設置数は103小学校区(児童会館を重複している地域が1小学校区ある)あり、設置率は49.8%となっている。

児童会館の規模は、昭和57年から、敷地1200㎡ に建物480㎡ を基準とし、施設内容としては、体育館、図書室、プレイルーム、クラブ室のほか、事務室などが設置されている(図3)。このうちクラブ室は「児童クラブ」の子どもの優先利用スペースとして設けられている

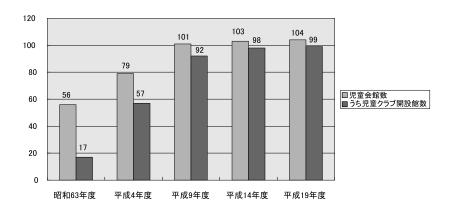
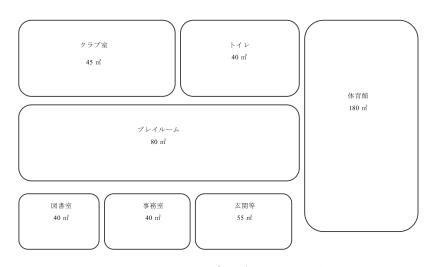


図2 児童会館数と児童会館内に設置されている児童クラブの数



<「札幌市放課後子どもプラン」より>

図3 児童会館の施設内容と面積

が、児童会館を利用する「児童クラブ」の子どもと一般利用の子どもとは分け隔てなく、積極的な交流の機会を通じて、健全育成を図っている。

児童会館には、「児童クラブ」担当の指導員が配置されており、「児童クラブ」に登録している子どもにかかわる業務を主に担当している。「児童クラブ」に登録している子どもたちは、学校から直接児童会館に来館し、児童会館内にある「カバン棚」にランドセルを置き、連絡帳を提出することになっている。

児童会館の利用者数は平成19年度において延べ人数約169万人で、平成20年度「児童クラブ」登録者数は6233人となっている(図4)。

また、札幌市では、将来的にはすべての小学校区で放課後の居場所を確保することを目指

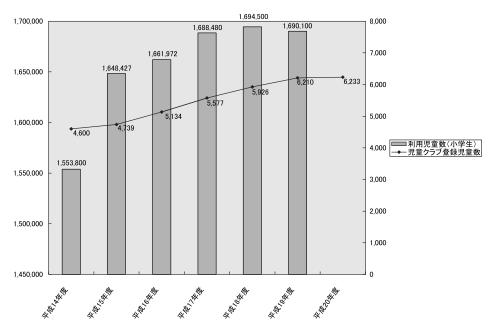


図4 児童会館の利用者数と児童会館内の児童クラブの登録者数

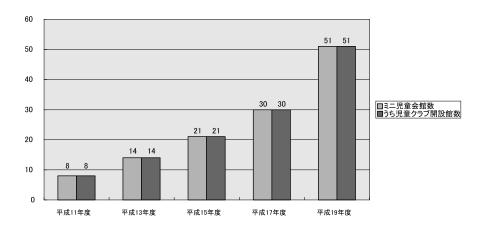


図5 ミニ児童会館数とミニ児童会館内に設置されている児童クラブの数

し、計画的に「ミニ児童会館」の整備を進めている。平成9年度から整備を進めているミニ児童会館は、児童会館が利用しづらい地域の小学校の余裕教室などを活用し、当該小学校のすべての子どもを対象として児童会館と同様の事業である。平成20年度4月までに、ミニ児童会館すべて(51館)で「児童クラブ」を開設している(図5)。

ミニ児童会館の利用者数は平成19年度において延べ人数約52万2千人で、平成20年度の

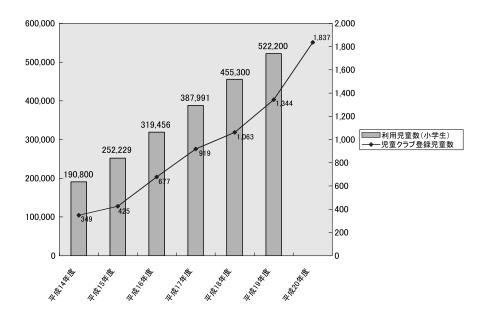


図6 ミニ児童会館の利用者数とミニ児童会館内の児童クラブの登録者数

「児童クラブ」登録者数は1887人となっている(図6)。 ミニ児童会館の小学校区に対する設置数は、平成20年度においては51小学校区(児童会館とミニ児童会館が重複している地域が3小学校区ある)、設置率は46.2%になっている。

児童会館、ミニ児童会館両施設において、ここ5年ほどの間では、一般利用者数も「児童クラブ」登録者数も増加傾向にあり、札幌市では、ミニ児童会館を平成22年度までに合計70館(すべてのミニ児童会館で「児童クラブ」を開設)にする予定としている。

札幌市の小学生の生活と現状

札幌市(http://www.city.sapporo.jp/kodomo/jisedai/shoshika.html) によると札幌市の出生率は、昭和58年当時では、合計特殊出生率が1.56人であったのに対し、平成18年では1.03人となっている($\mathbf{27}$)。全国的に少子化の傾向は進んでいるが、札幌市においては、平成17年度においては1.0を下回る率になっており、また、全国の主要都市と比較しても出生率においては低位となっている($\mathbf{28}$)。

また小学校の児童数は、昭和58年の約14万人をピークに減少しつづけ、平成20年5月現在では、約9万4千人となっている。小学校数は210校におよび、各区小学校数、総児童数、一校あたりの平均児童数を表1に示した。

子どもたちの日常生活については、平成15年の札幌市子ども育成部(2003)の調査による

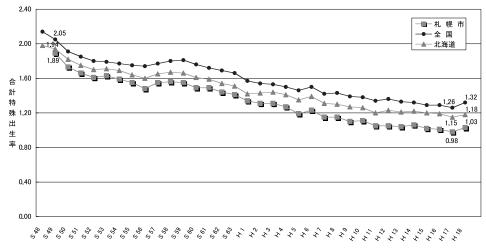


図7 合計特殊出生率(札幌市,北海道,全国)

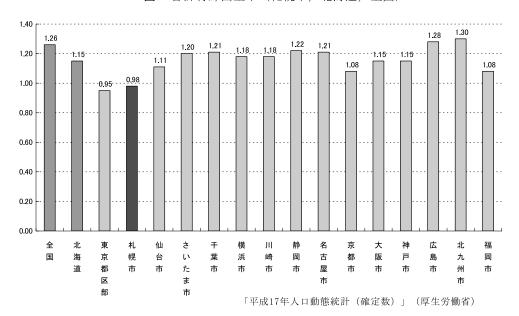
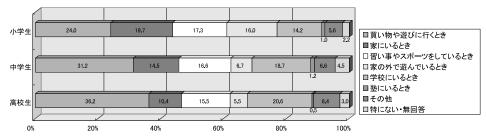


図8 全国・北海道・15大都市の平成17年合計特殊出生率の比較

と、「普段の生活の中で一番楽しいと思うときは?」という質問に対して、小学生の約1/4 が「買い物や遊びにいくとき」と答えており、次いで「家にいるとき」、「習い事やスポーツをしているとき」、「家の外で遊んでいるとき」と回答している。放課後、「家にいるとき」(19.7%)や「家の外で遊んでいるとき」(16.0%)が一番楽しいと思う子どもは小学生では約36%となっている(図9)。

表1	札幌市各区の面積とク	卜学校数及び総	児童数と平均児童数

区	面積(Km2)	小学校数 (分校含む)	総児童数	平均児童数
中央区	46. 42	18	9279	515. 5
北区	63.48	29	14167	488. 5
東区	57. 13	28	12768	456
白石区	34. 58	21	9108	433. 7
厚別区	24. 38	17	7664	450.8
豊平区	46.35	22	9818	446. 3
清田区	59. 7	15	6797	453. 1
南区	657. 23	24	7291	303.8
西区	74. 93	20	10333	516. 7
手稲区	56. 92	16	7341	458.8
合計		210	94566	450. 3



<資料>「札幌市子ども育成武『札幌市青少年基本調査』(平成15年)をもとに作成

図9 普段の生活の中で一番楽しいと思うとき

また、小学校 1 年生から 3年生の放課後の過ごし方についての調査からは、「 $14\sim16$ 時」代では、順に「公園など」「学校や公共施設」「家で保護者と一緒」が高い割合となっている(**表 2**)。

表2 放課後の日常的な子ども (小学校1~3年生) の過ごし方

(%)

				(70)
	14~16時	16~18時	18~20時	20時以降
学校や公共施設	24. 9	2. 2	0.3	0.3
放課後児童クラブや地域活動	11. 1	11.3	0.3	0.3
家で保護者等と一緒	21.6	46. 9	90. 1	91.8
家で子どものみ	2	4. 7	3. 1	1. 1
公園など	33. 6	18	_	_
学習塾など	3.8	13. 5	0.8	0. 1
その他	2. 9	3. 3	2. 3	6.6

<資料> 「札幌市放課後子どもプラン」より

目 的

文部科学省と厚生労働省は平成19年度より、総合的な放課後児童対策として「放課後子どもプラン」を策定し、各市町村において本事業を推進していくことをすすめている。その目的としては、「地域社会の中で、放課後等に子どもの安全で健やかな居場所づくり」を掲げており、小学校の余裕教室、児童館、公民館、その他の有効施設を利用し、放課後の児童に対し、勉強やスポーツ、文化活動、地域住民や異年齢の子どもとの交流、遊びの場、生活の場を提供している。

一昔前までは、子どもたちの放課後の生活は、子どものものであった。授業が終わってか ら. 子どもたちは野原や空き地. 路地など遊べるところであればどこででも遊んでいた。そ の時代には、「学校のなかでの子ども」に大人の注意は向けられ、子どもの生活の中心が「学 び」 におかれ始めた時代であった (深谷, 2006)。 放課後の過ごし方に大人が気を向け始めた のは1970年代に入ってからのことである。深谷(1987)によれば、かつての異年齢による 屋外での多人数の遊びから、「①室内で、②ひとりきりで、③体を動かさずに、④商品化され たものを相手に、⑤受け身の形で過ごす『孤立型』の」遊びに変質していったという。日本 が高度経済成長の勢いにまかせ,社会全体の構造や人々の価値観が変化し,それに伴い子ど もたちをめぐる環境も変化していった。テレビや少年誌が普及し、80年代なかばからテレ ビゲームが子どもたち部屋の中心におかれ、徐々に以前のような異年齢も含めた複数の子ど もたちが外で群れながら遊ぶという光景は、子どもの生活の隅に追いやられるようになって いった(NHK世論編集部、1991)。1990年代に入ると、青少年が巻き込まれる犯罪や非行 の問題に目が向けられるようになり、子どもたちの「居場所」について様々な議論が展開さ れるようになった。このような議論の中心になったのが、学校や家庭、地域で「居場所」を 失った子どもたちの生活の社会背景の問題であり(久田, 2000;三沢・宮台・保阪, 1999; 田中, 2001;鳥山, 1997). 子どもの健やかな育成を図るためには、家庭、地域、学校が連 携しあい、「心の教育」を豊かにしていく必要性が声高に言われるようになった。

こうしたなか、文部科学省は、地域の教育力の再生を銘打ち、平成16年度より3ヶ年、「地域子ども教室事業」を実施していった。この事業の目的は、地域の大人の力を集結して、子どもたちを温かく見守り、子どもたちが様々な活動を経験する場をつくることを通じて、子どもの健全な発達を促すものであった(西條、2005)。この事業は、平成19年から、厚生労働省の「放課後児童健全育成事業」と連携しながら、総合的な放課後対策として再編されていった。

子どもたちの放課後の「居場所」にかかわるこのような取り組みは、現在、全国各地で実施されつつあり、その内容については、事業の概要報告や実践報告が公表されているが(財

団法人 青少年野外教育財団、2008;中山・大阪保育研究所・大阪学童保育連絡協議会、2007)、その場を利用する子どもたちが、どのような理由で利用し、そこで具体的にどのような活動を展開しているのかについてはほとんど報告されていない。「放課後子どもプラン」が子どもの視点にたった施策であるためには、そのような事業のなかで子どもたちがどのような生活を営んでいるのかについて明らかにしていかなければならない。

方 法

調査対象:調査対象とした児童は、札幌市立N小学校に通う児童のうち、N小学校内の余裕教室(2教室分)を活用したミニ児童会館を利用する放課後児童クラブ登録児童(以下「児童クラブ」) および一般利用児童(1~3年生を以下「低学年」、4~6年生を「高学年」) である。札幌市におけるミニ児童会館は、その小学校区に居住する留守家庭児童を対象にした放課後児童クラブの児童と一般利用の児童が利用できる仕組みになっている。調査期間:平成20年10月6日、7日の2日間であった。調査方法:来館してきた児童のうち、遊びの合間をみて、児童本人から了承を得られた者に対して聞き取り調査を行った。なお、札幌市立N小学校の平成20年度5月現在での各学年の在籍児童については表に示した(表3)。

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
男児	35	52	42	36	50	37	252
女児	37	30	51	41	43	42	244
合計	72	82	93	77	93	79	496
家庭数	47	59	72	60	89	79	406

表3 調査対象校(札幌市立N小学校) の児童数

(平成20年4月17日)

結 果

(1)調査日におけるミニ児童会館来館者の概要

調査日の2日間では、「児童クラブ」「低学年」「高学年」の男女別の利用者数の内訳を表4に示した。調査を行った2日間の利用者は、「児童クラブ」の児童は58名、「低学年」の児童は59名、「高学年」の児童は14名であった。「児童クラブ」と「低学年」を合わせた、小学校低学年の児童の数が117名でミニ児童会館を利用した児童の89%であった。男女比別にみてみると、女児のほうが若干多く、「児童クラブ」と「低学年」の児童ではそれが顕著であった。

また表5に調査2日間での両日利用した児童とどちらか1日のみ利用した児童の利用者数を示した。「児童クラブ」の児童は「両日利用」した児童が18名と最も多かった。「低学年」児童では「10月6日のみ」利用の児童が19名ではあるが、「両日利用」も15名であった。この

	10/6	10/7	合計
児童クラブ	34	24	58
(男児:女児)	16 : 18	9 : 15	25 : 33
低学年	34	25	59
(男児:女児)	13 : 21	9 : 16	22 : 37
高学年	5	9	14
(男児:女児)	4 : 1	5 : 4	9:5
 合計	73	58	131
(男児:女児)	33 : 40	23 : 35	56 : 75

表4 調査実施日のミニ児童会館利用者数

表5 調査実施各日の利用者数と両日利用者数

	10/6のみ	10/7のみ	両日利用
児童クラブ	16	6	18
(男児:女児)	7 : 9	0 : 6	9:9
低学年	19	10	15
(男児:女児)	9 : 10	5 : 5	4 : 11
高学年	2	6	3
(男児:女児)	2 : 0	3 : 3	2 : 1
合計	37	22	36
(男児:女児)	18 : 19	8 : 14	15 : 21

ことから、調査校でのミニ児童会館への利用は、「児童クラブ」所属の児童以外でも低学年の児童であれば、比較的利用頻度が高いと考えられる。一方、4年生以上の「高学年」となると、「両日利用」している児童は3名、2日間合わせてものべ14名と低学年の児童よりも利用頻度は減る傾向にあるといえる。

各学年の調査日2日間の利用者数については**表6**に示した。「児童クラブ」所属の児童であっても一般利用の児童であっても、もっとも利用人数の多い学年は1年生で、学年が上がるにつれ徐々にその数は減少していく傾向にあった。

(2)調査協力者の基礎資料

調査日2日間で聞き取りに協力してくれた児童を表7に示した。「児童クラブ」に所属する児童は19名、「低学年」が11名、「高学年」が4名であった。「高学年」の児童の聞き取りへの協力者が少ないのは、「ミニ児童会館」に来館した児童の人数が少なかったためである。学年毎・利用種別毎(児童クラブ所属か一般利用か)の内訳を表8に示した。

4:0

4

4:0

31 : 42

131

55 : 76

1年生 2年生 3年生 4年生 5年生 6年生 合計 9 26 23 58 9 : 17 12 : 11 3:6 -:-- : --:-24 : 34 17 3 7 73 24 18 4

0:3

3

0:3

5:2

7

5:2

表6 調査実施日の学年毎の利用者数

表 7	間き取り	調査に協力し	くれた	- 児童数	(利用種別無)

9:8

26

12:14

	児童クラブ	低学年	高学年	合計
男児	9	2	3	14
女児	10	9	1	20
合計	19	11	4	34

表8 聞き取り調査に協力しくれた児童数 (学年毎)

	1年	生	2年	生	3年	生生	4年生 5年生		6年生	合計
	児童クラブ	一般利用	児童クラブ	一般利用	児童クラブ	一般利用	441	5年生	0年主	
男児	3	0	4	1	2	1	0	2	1	14
女児	3	5	5	1	2	3	0	1	0	20
小計	6	5	9	2	4	4	0	3	1	34
合計	1	1	1	1	8	3	0	3	1	34

聞き取り調査では、「ミニ児童会館を利用している理由」「ミニ児童会館の利用頻度」、「ミニ児童会館に来て楽しいか」「ミニ児童会館に来て楽しいことは何か」「平日、ミニ児童会館に来ていないときには値をしているのか」「平日、ミニ児童会館に来ていないときには誰と過ごしているのか」「ミニ児童会館でもっとしてほしいことはあるか」について質問した(資料)。

(3) 利用理由

児童クラブ

(男児:女児)

(男児:女児)

(男児:女児)

一般利用

合計

2 : 22

50

11 : 39

11 : 7

41

23 : 18

「児童クラブ」「低学年」「高学年」でとの利用理由について**表**9に示した。「児童クラブ」の児童は19名全でが「家族が仕事をしているから」であり、「低学年」においては11名中6名が「家族の用事」であり、「高学年」においては4名中3名が「楽しいから」という理由であった。「児童クラブ」の児童の場合、親の就労という理由により利用していることははっきりしているが、一般利用の「低学年」の児童の場合も、「家族の用事」によって利用しているということから、「児童クラブ」の児童と同じようなに境遇に置かれている可能性が高いこともうかがえる。一方でその親については、定期的な就労をしていないケースや、一時的な用事も考

國學院大學北海道短期大学部紀要第27巻

えられ、保護者の立場からしても、放課後を過ごすための安全な「居場所」として認識されていることもうかがえる。また、「高学年」の児童にとっては「楽しいから」という理由が多いが、「高学年」の児童の多くが以前は「児童クラブ」所属の児童であったとのこともあり、「高学年」の児童にとっては、「馴染みの居場所」として認識されていることがうかがえる。

(4) 利用頻度

	児童クラブ (n=19)	低学年 (n=11)	高学年 (n=4)	合計
家族が仕事	19	1	1	21
家族の用事	0	6	0	6
楽しいから	0	2	3	5
他に遊ぶところがないから	0	1	0	1
兄姉を待っている	0	1	0	1
合計	19	11	4	34

表9 ミニ児童会館の利用理由

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとの利用頻度について**表10**に示した。「児童クラブ」の 児童は19名全でが「ほぼ毎日」であり、「低学年」においては11名中4名が「ほぼ毎日」であり、 4名が「週1,2回」、「高学年」においては4名中3名が「ほぼ毎日」という結果であった。

(5)楽しいか

	児童クラブ	低学年	高学年	合計
	(n=19)	(n=11)	(n=4)	
ほぼ毎日	19	4	3	26
週1, 2回	0	4	1	5
家族の用事で月1, 2回	0	3	0	3
ほとんど来ない	0	0	0	0
合計	19	11	4	34

表10 ミニ児童会館の利用頻度

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとにミニ児童会館を利用することへの楽しさについて 表11に示した。「児童クラブ」の児童では18名が「楽しい」と答えており、「低学年」では9名、 「高学年」では3名の児童が「楽しい」と答えていた。

(6) ミニ児童会館に来て楽しいこと

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとに児童会館での具体的な活動で楽しみにしていることについて表12に示した。「ミニ児童会館に来て楽しいことはなにか?」という質問に対しては、「体育館を使った多人数での遊び」と答える児童が「児童クラブ」でも一般利用の「低学年」

表11 ミニ児童会館に来るのは楽しい

	児童クラブ (n=19)	低学年 (n=11)	高学年 (n=4)	合計
はい	18	9	3	30
いいえ	0	0	0	0
どちらでもない	1	2	1	4
合計	19	11	4	34

表12 ミニ児童会館に来て楽しみにしていること

	児童クラブ	低学年	高学年	合計
	(n=19)	(n=11)	(n=4)	
ブロック•積み木	4	2	0	6
コマ・けん玉	2	2	0	4
塗り絵 お絵かき	2	0	0	2
あやとり	0	1	0	1
マンガ・読書	2	1	0	3
00ごっこ	2	0	0	2
体育館を使った多人数の遊び*	6	2	3	11
行事	5	0	0	5
職員と遊ぶ	0	0	0	0
友だちと遊ぶ	3	0	1	4
一輪車	1	0	0	1
カードゲーム・トランプ	0	0	0	0
コインゲーム	1	0	0	1
ボードゲーム	0	2	0	2
いろいろ	0	1	0	1
特にない	2	2	0	4

*てんか、サッカー、ドッデボール、鬼ごっこ、大縄とび等

(複数回答可)

「高学年」の児童でも多かった。また、「児童クラブ」所属の児童は、「行事」と答える子どもが比較的多くいた。また「ブロック・積み木」「コマ・けん玉」など日常用意されている遊びを選択する児童も比較的多くみられた。

(7) ミニ児童会館で、誰と一緒に遊んでいるか

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとに普段一緒に遊ぶ友達について表13に示した。「児童クラブ」の児童、「低学年」の児童は「同学年同クラス」の児童を普段遊ぶ相手として指名する数が最も多かった。また、「児童クラブ」「低学年」の児童では、「他学年」を指名する数が2番目に多く、「児童クラブ」「低学年」の児童では、「同学年他クラス」の児童を指名する数が3番目に多かった。一方、「児童クラブ」「低学年」の児童では、「同学年同クラスのみ」で遊ぶことはあまりなく、「他学年」とも遊ぶことが明らかになった。

(8) 平日、ミニ児童会館に来ていないときに何をしているか

表13 誰とよく遊ぶのか

	児童クラブ	低学年	高学年
	(n=19)	(n=11)	(n=4)
同学年同クラス	18	11	3
同学年他クラス	10	6	3
 同学年のみ	. 8	3	1
同学年同クラスのみ	5	1	0
他学年	14	8	4

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとにミニ児童会館を利用していない日にしていることについて表14に示した。「児童クラブ」の児童の場合は、「公園で遊ぶ」ことが最も多く、次いで「ビデオゲーム」をしていると答える児童が多かった。また親が就労していることもあり、「ミニ児童会館に来ているから(他では)遊ばない」という児童も比較的多くいた。一般利用の「低学年」については、「公園で遊ぶ」「自宅でいろいろ」「習い事」「ビデオゲーム」「マンガや読書」など遊びの種類が「児童クラブ」の児童よりは多いようであった。一般利用の「高学年」では、「公園で遊ぶ」が多いが、「ミニ児童会館に来ているから(他では)遊ばない」がいることから、「高学年」の児童にとってもミニ児童会館が放課後の「居場所」として機能していることもうかがえる。

(9) 平日、ミニ児童会館に来ていないときに一緒に過ごす人は誰か

表14 ミニ児童会館に来ていないときにしていること

	児童クラブ (n=19)	低学年 (n=11)	高学年 (n=4)	合計
公園で遊ぶ	9	3	2	14
自宅でいろいろ	0	3	0	3
友だち宅でいろいろ	0	1	0	1
習い事	3	2	0	5
ビデオゲーム	4	2	0	6
トランプ	1	1	0	2
マンガ・読書	0	2	0	2
近所で自転車・一輪車の練習	1	0	0	1
00ごっこ	1	0	0	1
お出かけ	1	1	0	2
家の用事	0	0	1	1
ミニ児童会館に来ているから遊ばない	4	0	1	5

(複数回答可)

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとにミニ児童会館を利用していない日に過ごす人について表15に示した 全体的に見てみると、従来いわれているように、「同じクラスの友だち」

と過ごすことがもっとも多く見られる。「児童クラブ」の児童では、親が就労しているせいもあり、「母親」よりも「母親以外の大人の家族」と一緒にいることや「ミニ児童会館に来ているから遊ばない」が多くなっている。一方、一般利用の「低学年」の児童では、「同じクラスの友だち」が他と同様に多いものの、「母親」と一緒に過ごすや「一人で」過ごすことも多いようである。

(10) ミニ児童会館でもっとしたいことはなにか

表15 ミニ児童会館に来ていないときに一緒に過ごす人

	児童クラブ (n=19)	低学年 (n=11)	高学年 (n=4)	合計
母親	1	3	0	4
母親以外の大人の家族	3	0	1	4
兄弟姉妹	1	1	1	3
同じクラスの友だち	8	3	2	13
同学年の違うクラスの友だち	3	2	0	5
異学年の友だち	2	0	0	2
大人(習い事)	3	2	0	5
一人で	1	3	0	4
ミニ児童会館に来ているから遊ばない	4	0	1	5

(複数回答可)

「児童クラブ」「低学年」「高学年」ごとにミニ児童会館での活動でもっとしたいことついて**表16**に示した。「ミニ児童会館でもっとしたいこと、やりたいことはなにか」という質問に対して、全体では、「特にない」がもっとも多かった。次いで、「今ある玩具の数を増やしてほしい」という希望が多かったが、これは「児童クラブ」に所属する児童の希望が強く反映して

表16 ミニ児童会館でもっと行いたいこと

	児童クラブ (n=19)	低学年 (n=11)	高学年 (n=4)	合計
今ある玩具の数を増やしてほしい	4	1	0	5
新しい玩具の種類を増やしてほしい	2	0	0	2
マンガの種類を増やしてほしい	0	1	0	1
ビデオゲームを買ってほしい	1	1	0	2
家から持ってきたもので遊びたい	0	1	0	1
もっと時間を増やしてほしい	1	1	0	2
大勢で遊ぶ時間を増やしてほしい	0	2	1	3
体育館を使える時間を増やしてほしい	1	0	1	2
みんなで公園にいきたい	1	1	0	2
お手伝いをしたい	1	0	0	1
行事の種類・回数を増やしてほしい	1	0	0	1
自由に買い物に行きたい	1	0	0	1
部屋を広くしてほしい	1	0	0	1
けんかの数を少なくしてほしい	1	0	0	1
特にない	5	4	2	11

(複数回答可)

國學院大學北海道短期大学部紀要第27巻いるものである。

考察

ミニ児童会館を利用している児童たちの利用理由は大きく分けて二通り存在する。一つは子どもの自発的な意志でミニ児童会館に遊びに来るタイプであり、これは、一般利用の「高学年」児童や「低学年」児童に見られるタイプである。もう一方は、親の就労や用事によって家に大人が不在でミニ児童会館に来るタイプである。これのタイプは圧倒的に「児童クラブ」児童に多くみられるが、一般利用の「低学年」にも見られ、家庭で大人が不在になる時には、保護者も積極的にミニ児童会館を子どもに利用させるようにしている。その利用頻度は、「児童クラブ」の児童はほぼ毎日利用しているということは当然のこととしても、「低学年」児童の利用頻度もほぼ毎日もしくは週1、2回ほど利用しているケースが比較的多いことが伺える。親の就労やなんらかの都合によって、一般利用の子ども達も来ざるを得ない状況におかれていることが伺える。

利用頻度については、「児童クラブ」の児童は、親の就労という理由から19名全員が「ほぼ毎日」利用しているが、一般利用の「低学年」の児童においても、「ほぼ毎日」が4名いる。この4名の利用理由は、「母親が仕事だから」というものであった。また「週1,2回」利用するという「低学年」児童の中にも、「母親が買い物があるから」「母親が仕事がある時にくる」という理由で利用しているものがそれぞれ1名ずついた。一般利用の場合であっても、低学年の児童であれば、親の就労や都合によって、ミニ児童会館を利用していることが伺われる。これらのことから、ミニ児童会館は、低学年の児童をもつ親からすれば、就労している場合や家庭の事情により、放課後不在になる場合には、児童を安心して預けておくことができる「居させ場所」という特徴をもっていると言える。

しかし、一方で、子ども達は、嫌々ミニ児童会館に来ているかといえばそういったことではない。ミニ児童会館を利用する理由の中でも、親の仕事や用事以外では、「楽しいから」という理由も比較的多い。また、ミニ児童会館に来ることについての質問においても、利用して「楽しくない」と答えた児童は一人もおらず、ほとんどの児童が「楽しい」と答えている。では、子ども達は、ミニ児童会館での活動の何を楽しいと感じているのだろうか。全体的には、「体育館を使った多人数の遊び」を楽しみにしている。その内容は、ドッヂボールや札幌では「てんか」「かたき」と呼ばれるボールを使った遊びや、室内サッカー、大縄跳びである。この遊びは、調査当日も総勢20名あまりの児童が参加し、指導員が審判の役で遊びを調整しながら行われていた。また、「児童クラブ」の子どもは、月ごとに行われる行事も楽しみの一つとしてあげることが多かった。月1回の行事は、ほぼ毎日利用する児童にとっては、

ミニ児童会館は学校の教室を改造した場であっても、放課後の生活の場であり、マンネリ化 してしまいがちな日常に華を添える効果をもたらすのであろうか。

ミニ児童会館を利用したときに、誰と一緒に過ごすことが多いのかということについては、「児童クラブ」「低学年」の児童は、「同学年同クラス」の児童と答えることが、それぞれ19名中18名、11名中11名と、最も多かった。つまり、ミニ児童会館という、異年齢の児童が集まる場であっても、学校のクラスでの交友関係が強く放課後の交友関係にも影響していることが伺われる。一方、どの子どもも、「同学年同クラス」の児童を遊び相手として指名しつつも、遊び集団が「同学年同クラスのみ」ということになるわけではなく、「児童クラブ」「低学年」の児童も、「他学年」の児童も指名している方が多かった。この理由として、ミニ児童会館で、子ども達が楽しみにしている遊びが、「体育館を使った多人数の遊び」であることがあげられるであろう。この遊びは、一般利用の「高学年」から「低学年」、「児童クラブ」の児童まで参加する遊びであり、子ども達にとっては楽しみの活動であると同時に、他学年との交流の機会にもなっているようである。

一方、ミニ児童会館に来ていない時の遊び場所としては、「児童クラブ」の児童は「公園で遊ぶ」と答える児童が比較的多かった。また、一般利用の「低学年」児童が比較的多くの「居場所」を確保しているのに対し、「児童クラブ」の児童は、自宅や友だちの「家で」遊ぶことは少ないようである。「児童クラブ」を利用している児童の方が、ミニ児童会館に来ていないときは、屋外で過ごすことが多いようである。公園では、友達とキャッチボールをしたり、「てんか」をしたりすると答える児童が5名いた。また、ビデオゲームを友人に家でやっているという児童や、習い事に通う児童も比較的多く見られた。

ミニ児童会館に来ていないときの過ごす相手は、同じクラスの友だちが「児童クラブ」「低学年」でも多くなっていた。それでも、同学年の違うクラスの友だちや、異学年の友だちもいるようで、交友関係も決して、同一クラス内に限定されたものとは限らないようである。

結 論

「最近の子ども達は遊ばなくなった」という言葉は、筆者の子ども時代、1970年代後半から聞かれるようになった。その直前の時代には、屋外での異年齢集団での遊びは確かに存在していた(宮原、2006)。「居場所」という特別な場所があるわけでなく、大人の目が届きづらい場所であれば、そこはすぐに子どもの遊び場になり、そして、子どもが家路つけば、そこは元の生活空間や特に名の付かない空間に戻っていった。しかし、現在においては、安全上の問題からか、いたる所が「大人の目の届く空間」に変化し、ある特定の空間を子どもの「居させ場所」とせざるを得なくなってしまった。

國學院大學北海道短期大学部紀要第27巻

時間や場所を特定されるということは、子ども達の人間関係までも変化させていった。本来、放課後は、学校空間から解放され、子ども達にとって自由な時間であり、放課後には、「放課後空間」が展開されていた。学校空間は、同質性の高い人間関係で結ばれる空間であるのに対し、放課後はそれとは対照的に、異質性にあふれた人々が出会う可能性のある空間であった(天野、2007)。

しかし、現在、その解き放たれた空間と時間の中で、子ども達、そしてその親たちは、拠り所を求めさまようこととなる。習い事や学習塾は、そういった意味で、子どもにとっても親にとっても、安心できる「居場所」になりうるのであろう(山縣、2009)。用意された空間の中に集い、交わることの安心感を覚える一方で、虚空の中では、互いに他人として一瞥も交わさない。今、「放課後」という時間は、そのようになりかけている。

「放課後まで、大人の監視の中に子どもをさらすのか」という批難もあると思う。しかし、それは、大人が子どもにどのように接するかといった問題である。そのまなざしが、監視になるかどうかは大人の側の問題であろう。用意された空間であっても、そこに子ども達が集い始めれば、虚空の中で無関心であった子ども達が、互いの存在を意識し始めるようになる。それは、虚空の中での他人が、「他者」として互いの関係の中で生き始めることである。互いに知り合い同士の安心した関係を築くことも、社会性の発達に関しては重要なことではあるが、知り合いではない人ともなんとか共生、共存する力を養っていかなければならない(松田、2009)。そういった場として、放課後の居場所が子ども達の生活の中に位置づけられるべきである。

引用文献

- 天野正子 (2007) 子どもの原風景と地域空間 藤竹暁 (編) 現代のエスプリ別冊 現代人 の居場所 至文堂
- 深谷昌志(1987) 灯台ブックス83 放課後の子どもたち 第三文明社
- 深谷昌志(2006) 子どもの放課後をどう考えるか 4節「子どもの放課後」の社会史 『いま,子どもの放課後はどうなっているか』 深谷昌志・深谷和子・高旗正人(編) 北大路書房
- 久田邦明(2000) 子どもと若者の居場所 萌文社
- 松田恵示(2009) 「放課後子どもプラン」への期待と問題点 児童心理2009年2月号臨時 増刊 金子書房
- 三沢直子・宮台真司・保阪展人(1999) 居場所なき時代を生きる子どもたち 子ども劇場 センター出版局

宮原洋一(2006) もうひとつの学校 新評論

中山徹・大阪保育研究所・大阪学童保育連絡協議会(編)(2007) 「放課後子どもプラン」と 学童保育 自治体研究社

NHK世論調査部(編)(1991) 現代小学生の生活と意識 明治図書

西條英吾 (2005) 地域子ども教室推進事業について 杉山千佳 (編) 現代のエスプリ N o. 457 子どものいる場所 至文堂

札幌市 「少子化の現状」 札幌市次世代育成支援対策推進行動計画

http://www.city.sapporo.jp/kodomo/jisedai/shoshika.html

札幌市・札幌市教育委員会(2008) すべての子どもたちが安全で安心に過ごすことができる放課後の居場所づくりをすすめるために:札幌市放課後子どもプラン 札幌市子ども未来局・札幌市教育委員会

札幌市子ども育成部(2003) 「札幌市青少年基本調査」

http://www.city.sapporo.jp/kodomo/jisedai/q.html#seisyounenn

田中治彦(編)(2001) 子ども・若者の居場所 学陽書房

鳥山敏子(1997) 居場所のない子どもたち 岩波書店

山縣文治(2009) 放課後に安全な居場所のない子どもたちへの施策展開-留守家庭の子どもからすべての子どもを視野に入れた施策へ 児童心理2009年2月号臨時増刊 金子書房

財団法人 青少年野外教育財団 (2008) 放課後子ども教室の先進事例集 総合的な放課後 対策の推進のための調査研究報告書

[「]児童会館」 児童福祉法第40条に規定する児童厚生施設の1つで、地域において児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする児童福祉施設の児童館を札幌市においては「児童会館」と呼んでいる。児童館には、小型児童館、児童センター、大型児童館といったその機能と規模によって3種類に分類されるが、札幌市における「児童会館」は、そのうちの児童センターにあたるものである。

^{『「}ミニ児童会館」 児童会館の整備を進めつつ、平成9年から児童会館が利用しづらい地域の小学校の余裕教室などを活用し、当該小学校のすべての子どもを対象として児童会館と同様の事業を行っているものを「ミニ児童会館」と呼んでいる。すべての「ミニ児童会館」には「放課後児童クラブ」が開設されている。

資料 調査で使用した調査用紙

インタビュー	用紙(小学校)				平成 年 月	日
学年		性別	氏名 or 特徵		区分		
年	組	男•女			登録•-		
参加(利用):	理由						
参加して楽し	いこと						
ミニ児童会館	官で一緒に	遊ぶ友達	(同クラス, 他クラス				
(氏名)	(氏名)			
(氏名)	(氏名)			
(氏名)	(氏名)			
(氏名)	(氏名)			
(氏名)	(氏名)			
(氏名)	(氏名)			
子ども教室に	こ来ていな	いとき, 誰と何	している?				
子ども教室で	きもっとやっ	ってほしいこと,	やりたくないことは?				